

# 報告

## 地域医療市民フォーラム・帯広市

どこで死を迎えるか…看取りの医療

常任理事・医療政策部長 直江 寿一郎

11月3日（火・祝日）午後1時から、帯広市のとちプラザで開催したフォーラムには、市民や医療関係者190名が参集し、人間として避けて通ることができない死と看取りの医療について学んだ。

また、アンケート調査を行った。



小職が司会を務め、挨拶に立った長瀬当会会長は、在原業平の「つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」という辞世の句を引用して、われわれは、死を迎えることを常に念頭において生きていかなければならないと述べた。

昭和51年に在宅死と病院死が逆転し、病院死が多数を占める状況になったが、国は在宅医療を推進しており、家庭のような病院構想（富山県・ナラティブホーム）も出ていることなど紹介し、「実りあるフォーラムになることを期待申し上げる」と結んだ。

堀帯広市医師会長は、医師は患者さんの健康寿命の引き伸ばしを考えるが、人間は必ず死を迎える。死を共通の問題として取り上げ、PPK（ピンピンコロリ）、達者で往生を全うできるよう、フォーラムを通じて考えていただきたい、と述べられた。

はじめに富永剛帯広市医師会理事が、「帯広市民はどこで死を迎えているか」という演題で講演された。

富永理事は、スライドで、日本の年間死亡者数は戦後70万人で推移してきたが、平成15年に100万人を突破、ピークである平成52年は168万人と推計されている。帯広市の平成19年度の死亡者数は1,232人。帯広市も平成17年から人口減であるが、高齢者は今後も増加すると説明。

50年前は8割が在宅死であり、近隣の内科開業医が看取りを行っていたが、現在では8割以上が病院死。在宅死を受け入れてくれた有床診療所も、往診も減り、いつしか病院死が日本人の文化となったと分析された。

葬儀社から得た情報として、在宅死の大半は家族に看取られての死ではなく、事故死・自殺死であると明かされた。また、末期がんで、自宅で心肺停止



講演・富永帯広市医師会理事



会場の様子

になっても病院に搬送されれば病院死になる。北海道は在宅死が9.6%と全国一少ないが、帯広は93%が病院死である。帯広市のがん患者の在宅死は全国平均の6%に対してわずか2.3%などと指摘された。

また、国が平成18年の医療制度改革で掲げた後期高齢者医療制度、療養病床の再編、在宅療養支援診療所などにより、在宅死亡4割を目指しているが、在宅死を増やすためには介護体制の充実が不可欠であると指摘され、医療と介護、看取りについて真剣に考えるときが来ていると示唆された。

パネルディスカッションでは、富永理事が座長になり、5名のパネリストが問題提起した後、フロアの参加者を交えて意見交換した。

西田内科医院の西田雅喜院長は、自宅か病院か、それぞれプロセスがある。在宅で看取りができるのは資産もあり、人手もある幸運な例。私たちは、自分や家族の臨終の場を選択できるだろうかとの疑問を投げかけ、最期の際は個人が準備するものなのか、身体的、個人的な条件に関わらず、個人の意思が尊重されるように、社会が準備すべきものではないかと提起された。

また、医療の問題は政治と切り離されないものであり、予算の話に集約されると指摘された。

訪問看護ステーションろらんの山田るり子所長は、2年前から在宅療養支援診療所を開設し、訪問看護ステーションで16件の看取りに接したが、その

初めての例として、娘夫婦が、認知症の母とともに上顎がんの80代の父親を在宅ホスピスケアで看取った事例を紹介し、最期を家で過ごしたいという患者や家族を支援し、タイミングを逃さず、患者・家族の迷いに適切に対応すること、患者・家族と死生観を共有することの重要性を指摘された。

特別養護老人ホームけいせい苑の中嶋美加看護師は、7年前から始まった看取りのケアで、9人の最期を看取ったことを述べられ、そのきっかけとなった7年前に、ホームに長く居住し、回復が見込めない高齢者の家族の「最期までホームで過ごさせて欲しい」という願いを聞き入れて、本人や家族が望む「最期のかたち」を模索しながら107歳で逝くまで世話をした事例など報告された。

帯広厚生病院第一内科の山本真主任部長は、地方センター病院、地域がん拠点病院、災害時拠点病院、24時間体制の救命センターという急性期病院である当院の第一内科56床の7割前後は肺がん患者、死亡退院が毎年80～100名になると報告。心肺停止の80代はほとんど生還しない。それでも治療を求め、死を認めない風潮に憂慮を示した。また、最近、肺炎治療後、家族に速やかに引き取ってもらえないこともあり、難渋していると打ち明けられた。

最後に、お茶の間わいわいクラブの山口智恵子代表が、100円硬貨1枚を持参すれば、おやつが出て、自分の家のようにくつろいでおしゃべりができる地域交流サロンを13カ所で展開している。ぜひ出かけてきて、たくさんの友達をつくっていただきたい。

仲間内で看取りの話をしたらみんなが「やっぱり家族に看取られたい」と答えたことなど紹介された。

質疑応答では、市民から「自分の状態に応じてどこに行けばよいか相談にのってもらえる場所を知りたい」という質問があり、帯広厚生病院の山本第一内科主任部長が、「病気については、まず、病院の総合受付で相談していただきたい」と、また、フロアで聴講していた帯広市保健福祉部の大谷高齢者福祉課長は、「介護保険は、本庁の1階の介護保険課や市内4カ所にある地域包括支援センターで相談していただきたい」と回答した。

自らも訪問看護をした元看護師は「ドクターや看護師やMSWなどが、患者や家族に共感を持って接している様子に感動した。自分の生き方、死に方を考えるよい機会を与えてくださり、ありがとう」と、また、在宅介護支援センターの支援を受けて、90歳を超える母親を在宅看護した音更町の女性は、毎日往診していただき、家族みんなが見守りながらよい最期を看取ったという体験を披露した。

富永座長の質問に、山田所長は150名の利用者に9名の訪問看護師が対応していると、診療支援を行っている北斗病院の山下先生が状況を説明された。

また、山田所長は、最期が迫り家族が不安になって在宅を断念するケースがあることを明らかされた。

中嶋看護師は、けいせい苑の入所者について150名と回答。フロアから、大江先生が、平均年齢は80代、ほとんどが認知症であると付け加えられた。

ほかに「地域交流サロンは女性が多く、気後れする」という意見も出され、山口代表が、「若い人や男性にもっと来ていただきたい」と勧誘された。

富永座長は、「立派な家族がいるから立派な死になる」と結ばれ、最後に小職が「一人ひとりのオーダーメードの満足を反映する最期になるよう、働きかけていきたい」と述べ、フォーラムを終了した。



フォーラム開催にあたり、企画、進行に当られた帯広市医師会の堀会長、富永理事をはじめ、ご尽力いただいた会員各位、共催、後援として快くご支援いただいた十勝医師会ほか10団体、何よりも、熱心にご聴講いただいた市民の皆様に感謝申し上げますとともに、今後、北海道の地域医療を考える上での貴重な糧としていきたいと心した次第である。

#### 「地域医療市民フォーラム・帯広市」プログラム

日 時：平成21年11月3日(火・祝日)13時～15時25分  
場 所：とがちプラザ 2階 視聴覚室  
主 催：帯広市医師会・北海道医師会  
共 催：帯広市・北海道十勝保健福祉事務所・  
十勝医師会  
後 援：北海道新聞帯広支社・十勝毎日新聞社・NHK帯  
広放送局・HBC帯広放送局・STV帯広放送局・  
OCTV・FMウイング・FM-JAGA

#### 1. 開 会

司 会 北海道医師会常任理事 直江寿一郎

#### 2. 開会挨拶

北海道医師会会長 長瀬 清  
帯広市医師会会長 堀 修司

#### 3. 基調講演

座 長 帯広市医師会会長 堀 修司  
演 題 「帯広市民はどこで死を迎えているか」  
講 師 帯広市医師会理事 富永 剛

#### 4. パネルディスカッション

テーマ「どこで死を迎えるか…看取りの医療」

座 長 帯広市医師会理事 富永 剛

パネリスト

- ・医療法人社団 西田内科医院  
院 長 西田 雅喜
- ・社会医療法人北斗 訪問看護ステーションろらん  
所 長 山田るり子
- ・社会福祉法人慧誠会 特別養護老人ホームけいせい苑  
看護師 中嶋 美加
- ・JA北海道厚生連 帯広厚生病院 第一内科  
主任部長 山本 真
- ・地域交流サロン「お茶の間わいわいクラブ」  
代 表 山口智恵子

意見交換

#### 5. 閉 会